教育の広場

校庭芝生化のすすめ
地域の「広場」として学校再生を

池田知隆

「校庭に多くの鳥が飛んで来た」
「子どもたちが早朝から校門が開くのを待っている」
「長期欠席の児童がいなくなった」
校庭を芝生化した学校の校長からそんな報告が相次いでいる。都市のヒートアイランド対策、環境教育、けがの防止などを掲げた「緑のじゅうたん」は予想以上の効果をあげているようだ。東京都は、オリンピック招致を目指している2016年に向けて全公立小中学校の校庭芝生化に着手し、大阪府の橋下徹知事もその推進を選挙公約に掲げた。大阪市教育委員会は、それに加えて「緑化カーテン(壁面緑化)」の普及にも乗り出している。いま、校庭の芝生化は静かに根付き、広がっている。

鮮やかな緑

校庭の全面芝生化に取り組んで3年目になる大阪市立味原小学校（大阪市天王寺区、児童数167人）を訪ねた。JR大阪環状線鶴橋駅から徒歩5分にある街中の小学校で、今年10月に創立100周年を迎える。

「わあ、きれい！」。校門をはいると、校庭一面の鮮やかな緑が目に飛び込び、思わず声が出た。ビルの谷間の学校とあって校庭は狭いが、「緑のじゅうたん」がきっちりと敷き詰められている。芝のやわらかい手触りと青い香り。ふわふわした芝の上で、ドッジボールをしていた子どもたちの歓声がひときわはずんでいるように聞こえた。なぜか懐かしく、癒されていくようで、芝生の持つ不思議な魅力を改めて感じさせられた。

「どうです、やはり芝生はいいでしょう」

出迎えてくれた松本長夫校長はにこやかに語る。いつも緑に触れ合っていると、自然に表情がやわらかくなるのかな、と思えるほどだ。

「芝生になって、照り返しがなくなりました。子どもたちが、運動場にでると涼しい、とつぶやいていましたよ」

運動場に芝を張ることで、真夏には土の場合との温度差が10度以上になるという。

遊びが変わる

芝生化してからの3年間は松本校長にとって「新鮮な体験の連続だった」そうだ。

まず子どもたちの遊ぶ姿が変わった。芝生がマット代わりになるので、子どもたちが寝転んでいる。横になってごろごろと転がっている。裸足になって走りまわっている。座り込んでおしゃべりしている。そんな光景がごく当然のように見られるようになった。

子どもたちにも芝生は大好評だ。「転んでも痛くない」「緑がきれい」「砂が目に入らない」「芝生の上は走っても疲れない」。みんな、外に出て遊ぶことの楽しさを満喫している。

そんな子どもたちの姿を見ていると、ずいぶん昔、芝生に大の字で寝ころんで、ほんわかと心が落ち着いた気持ちがわきあがってくる。真上にはてしなく広がる空。ゆったりと流れる雲。それを見ているだけで心がどれだけ解放されたことだろう。やはり芝生はいい。芝生は大人も子どもにする。

芝生化による効果として各学校から、「休み時間に外で遊ぶ子どもが増え、

海の恵み にがりを残した

はかた 伯方の塩®

※伯方の塩®は、輸入天日海塩と海水を原料に使用しています。

伯方塩業株式会社

〒790-0813 愛媛県松山市萱町4丁目4-9
TEL(089)911-4140(代) FAX(089)923-9671
ホームページ http://www.hakatanoshio.co.jp

運動量が増加した」

「廊下や教室に上がる砂が減り、清掃時に砂ぼこりが舞い上がることが少なくなった」

「運動場でのケガの予防につながった」

「芝生を通して、地域との連携が深まった」

「学校の景観がよくなった」

という報告があがっている。ある小学校では、それまで歩行器でしか歩かなかった児童が、校庭が芝生になった途端、クラスメイトの力を借りながらも自分の足で歩くようになったそうだ。松本校長もいう。

「小児喘息の子の保護者から、喘息の症状がでなくなった、といわれましたよ」

赤とんぼが舞う校庭

運動場が土だったときには見ることができなかったいろんな生き物が、芝生化とともに現れた。カマキリ、トノサマバッタなどの昆虫から、ムクドリ、セキレイ、スズメなどさまざま鳥たちまでやってきた。キノコもたくさんはえてきた。

昨年10月、秋の運動会のとき、芝生の上で児童たちが集団演技している空一面に、赤とんぼの群れが舞った。「ああ、いいなあ」。テントの中で見ていた地域の人たちからおもわず歓声があがった。昼食のとき、芝生の上であちこちの家族から談笑が響きわたった。身近なところに自然がよみがえっていることを、子どもも教職員も地域の人もみんなで喜びあった。

芝生のうえで寝転ぶ子どもたち（体育の授業で）

学芸会が開かれたあと、地元の人たちに校庭の芝生を開放している。夏休みの間、校庭でテントを張っている野外体験活動も芝生化したことで盛り上がっているという。

広がる芝生化の動き

校庭芝生化の歴史をみると、1970年代ごろ、各地で一時的に盛んになったという。大気や水質の汚染など公害問題が表面化し、自然環境の大切さが叫ばれだしたころだった。

その後、都心部を中心に、排水性を考え、細かく砕いた石灰岩を敷き詰めた「ダスト舗装」や、全天候型テニスコートなどで見られる「ゴムチップ舗装」も広がってきた。だが、アスファルト化が進み、コンクリートのビルが増えて都市部の気温が上昇、ヒートアイランド現象が広がったことで2000年ごろからふたたび芝生に関心が集まった。児童数が少なくなって校庭利用をめぐって余裕ができたこと、芝生に関する関心や知識が広がったこと、学校をめぐる地域やボランティア団体の支援体制も整ってきたことなどがその背景にある。

２００１年度、群馬県が校庭の芝生化事業を始め、05年度には東京都の全校芝生化構想を打ち出し、ヒートアイランド対策として大阪府も積極的に取り組み始めた。

東京都はこれまで約１８６０の小中学校のうち、申請があった約70校を芝生化したが、全体の４％にも満たない。大阪市内では、大阪府のモデル事業として04年度から清江小学校（住之江区）１校で始まり、翌05年度から市単独事業としてこれまでに17校で実施、今年度も12校で芝生化に取り組む予定だ。文部科学省によると、全国の公立学校でグラウンドの３００平方㍍以上を芝生化しているのは１４９２校で、屋外運動場がある学校のわずか４・13％（07年５月現在）にすぎない。

芝生の育ちは教育

味原小学校は05年、職員室前の90平方㍍を芝生化し、翌06年から校庭（１９５０平方㍍）の全面芝生化に取り組んだ。同小の事業予算は約４６０万円。このうち市が半額の２００万円（別に用具費など30万円）を負担。地元住民たちも芝生化に賛同し、将来的な維持費を見越して約３００万円の寄金を集めた。

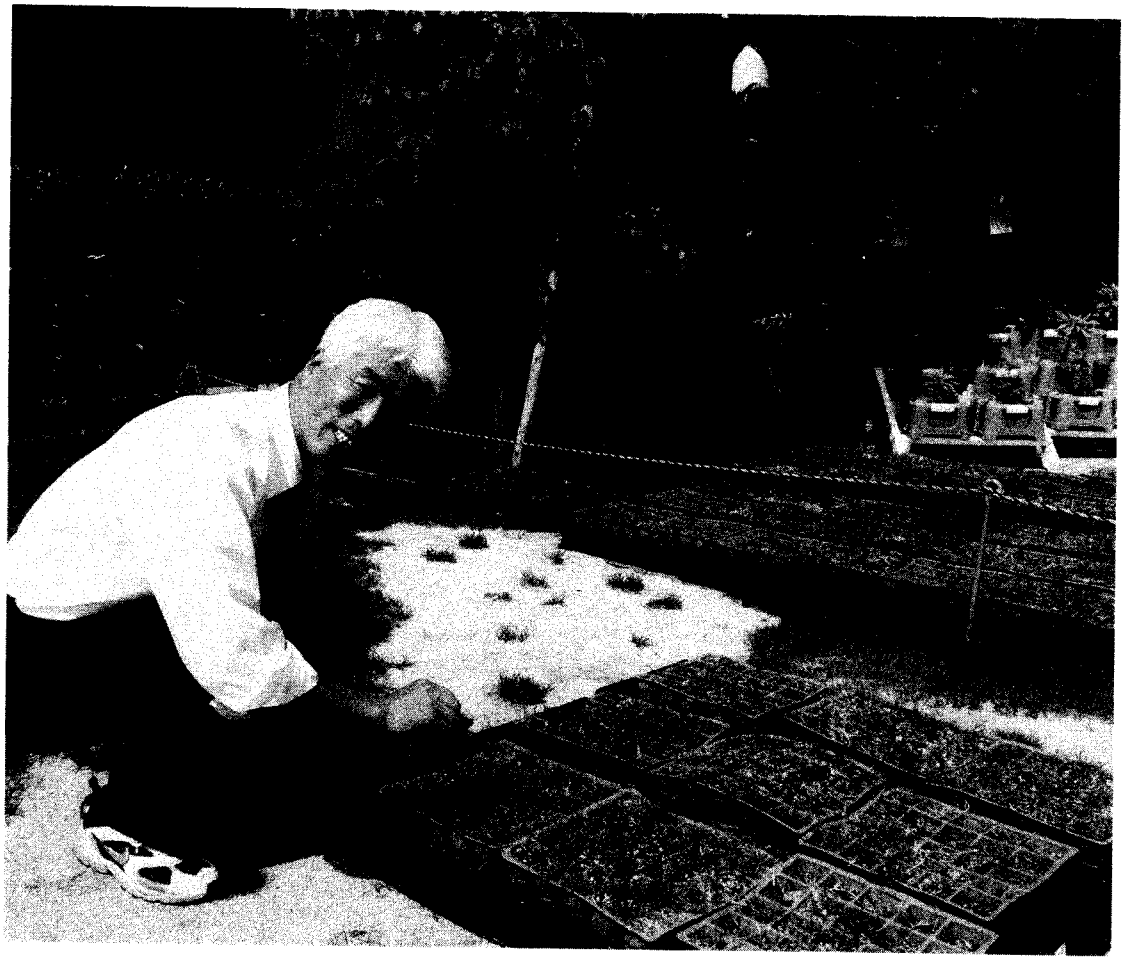
まず、校庭一面に夏芝を張ることから始まった。保護者からは「芝生を育てるために、子どもが遊べないというのは本末転倒」という声があがり、子どもたちにできるだけ芝生で遊ばせる方針をとった。予期されていたとおり、芝生は枯れ、地面が現れた。

芝生の校庭づくりは、失敗したり、芝生がはげたりしても、それが当たり前と考えたほうがいいようだ。子どもたちが使う運動場は、スポーツの公式試合をするような立派なものにする必要はない。校庭には校庭に合った芝生があり、草原のような強い芝をつくるために知恵を集めていけば、それで十分なのかもしれない。

翌07年度、「育苗ポット」方式を採用。小さなポットに土をいれ、元気な芝を2、3本植え付けると、3、4週間後には植え付けた芝が伸び、根がしっかりと張った芝の塊ができる。それを運動場に穴を掘り、植え付ける（50㌢四方の正方形の中に苗を一つ）と、2か月ほどで運動場一面に芝生が生長し、芝生化が完成した。

このやり方は、コスト面からもかなりの経費削減になった。長居スタジアムで使われていた天然芝の一部が学校内に持ち込まれ、「有名なアスリートが踏みしめた芝生がやって来た」と子どもたちも喜んだ。それになにより、自らが芝植えを経験し、自分たちで緑の校庭を作り上げていくという達成感が子どもたちの心

C-607
荒れて弱った胃粘膜を修復する
新キャベジンコーワS
効能／胃重、もたれ、むかつき、胃痛、胃弱　医薬品
Kowa 製造元 興和株式会社　販売元 興和新薬株式会社
（製品情報）http://hc.kowa.co.jp
OTC 医薬品



育苗ポットの作り方を説明する松本長夫校長

の糧になっている。

「芝生化するには、育苗ポット方式が一番いい。子どもたちの間にも、遊びたい気持ちを少し抑え、しばらく体育館で遊んで芝生を守ってやろう、というやさしい気持ちが生まれています」

と松本校長はいう。

「水をやりすぎると、根が深く伸びない。だから、ときには試練を与えないと、たくましくは育たない。そんなことも自然と学んでいきます」

秋の運動会のあと、夏芝の上に冬芝の種をまく「オーバーシード」を実施した。夏芝は冬になると休眠期に入り、黄色がかった色になってしまうため、冬芝の種をまき、青々とした芝にすることができるからだ。芝をこのような2層構造にすることで、夏芝の保護にもなる。そのためには種をまいたあと、3週間程度の養生期間が必要だが、その間に校外学習を当てたり、体育館の利用を増やしたりして「芝生が休める時間」を設けたという。

欠かせない地域の協力

芝生化は、樹木による緑化と違って、水やりや肥料を与えるなど管理に労力がかかる。「自分でやれることはやる。それが維持管理の費用を抑えるポイントです」と松本校長はいうが、学校だけの力ではできないこともある。

校庭の土が毎日踏み固められ、カチカチになると空気が地中に入らなくなり、芝生の生育に支障がでる。このため2年に1回程度、土をほぐす「エアレーション」と呼ばれる作業が必要で、通常は専用の機械を使って行われる。こればかりは学校で購入するわけにはいかず、各学校で順次使えるようにしなくてはならない。そこで大阪市教育委員会は、小学校の校庭を芝生化する運動に取り組んでいるNPO法人「芝生スピリット」などと協力し、維持管理面でも積極的な支援に乗り出している。

さらに学校は数年単位で職員が異動し、特にトップの校長が代われば運営方針も変わってしまう。芝生のグラウンドを一過性のものにしないためには、教職員の負担を軽減する措置を取らなくてはならない。

「大阪市は、子どもたちの学力の向上が大きな課題になっており、教職員にはできるだけそちらに力を注いで欲しい。芝生化には住民の協力が欠かせません」

松本校長はそう強調する。

大阪市の場合、学校と地域住民による「緑化推進（芝生化）事業委員会」を組織し、種まきや芝刈り、水やりなどの作業に住民の協力を求めている。味原小学校の場合、育苗の植え付け作業に、PTAや地元の住民たちが積極的に参加している。その作業の場は、住民たちにとっても楽しい交流の場にもなっている。

「普段ほとんど来ることのない小学校に定期的に立ち入る機会ができ、うれしい」

「この小学校の卒業生だが、戦時中、この学校は……」

そんな会話が広がり、地域のコミュニケーションや世代を超えた交流が育まれていく。芝生の広場があれば、子どもだけではなく、高齢者だって外に出たくなる。校庭の芝生化は、学校と地域住民をつなぎ、地域再生のきっかけとして確かに役立っている。

「原っぱ」の復活

こうしてみると、芝生化された校庭は、団塊世代の私の子どものころの「原っぱ」ではないか、と思えてくる。戦後60年余、日本は経済発展していく中で、子どもたちを取り巻く生活環境が大きく変化し、地域の絆が失われてきた。だが、失われたものが子どもたちの成長にとって欠かせないものであるならば、どこかでそれを補わなければならないはずだ。校庭芝生化は、「原っぱ」という自由な空間を地域によみがえらせる試みともいえる。

「芝生は管理が大変でしょう？」と他の学校関係者から聞かれるたびに、松本校長はいう。

「芝生化は、メリットがはるかに大きい。やれば、できるもんですよ。芝生の管理が大変というイメージが広がっているようだけど、芝生のよさをもっと積極的にアピールしていきたい」

多くの学校は「石橋を何度もたたいても、渡らない」世界に浸りきっている。平穏無事で、何もしなければ問題が生じないという「事なかれ主義」も横行している。芝生化するよさがわかっていても、維持管理の大変さを理由にあげて、踏み切れないでいる学校は少なくない。

地域住民の協力が求められる校庭の芝生化まで一気に進まなくても、学校緑化への関心を育てようと大阪市教委は今年度から校舎に「緑のカーテン（壁面緑化）」をする補助事業（今年度は12校で実施）を始めた。「緑のカーテン」は、ツルのある植物を校舎の窓際にはわせ、カーテンのように日差しをさえぎるもので、ゴーヤなどの実のなる植物を植えると、収穫の楽しみも味わえる。学校に緑が増えれば、夏の暑さもしのぎやすくなる。松本校長は繰り返しいう。

「一番大切なのは、子どもたちや保護者、地域の人、教職員がいっしょになってやることです。芝生の校庭も、自分たちの手でつくることで愛着が生まれ、楽しみながら育てていくモチベーションにつながっていきます」

「それを作れば……」

映画『フィールド・オブ・ドリームス』(Field of Dreams、1989年、米国)のこんなセリフがある。

「それを作れば、彼がやって来る("If you build it, he will come.")」

貧乏農家の男がトウモロコシ畑を切り開き、つくった小さな野球場に、ある日の晩、失意のうちに生涯を終えた野球選手が現れる……という野球を題材に夢や希望、家族の絆を描き上げたファンタジー映画だ。日本サッカー協会の川淵三郎・前会長は長年、そのセリフを引用して「〝芝生の広場〟ができれば、子どもも大人も飛んだり、跳ねたり、転げたりできる」と校庭の芝生化を訴えてきた。

まったくそのとおりだと思う。「緑に包まれた学校」は、まるで自然に抱かれているようで人の気持ちをなごませる。少子化による子ども社会が変わり、核家族化によって家族機能が失われつつあるなかで、現代の子どもたちは強いストレスにさらされている。校庭の芝生化が、そんな子どもたちを野外に誘いだし、友だち関係を豊かにさせ、ストレスを軽減させるのは確かだ。校庭が「芝生の原っぱ」になれば、学校が地域社会の〝広場〟として再生する。

芝生で遊ぶ子どもたち

※芝生とは

植栽された芝生は、イネ科の植物・芝草によって覆われたものだ。芝草は、生育温度と栽培地域の違いによって、暖地型と寒地型のものに大きく分けられる。日本在来のノシバやコウライシバ、外来のバミューダグラス、それから改良されたティフトンなどが暖地型。ヨーロッパにその起源をもつブルーグラス、フェスク、ライグラス、ベントグラスなどが寒地型にあたる。地域の気候環境、目的やその後の管理の仕方によって品種が選ばれ、混植、オーバーシードなどが行われている。

(毎日新聞論説委員)

NL

2008

9

CONTENTS

教育の広場

●校庭芝生化のすすめ　地域の「広場」として学校再生を　4

NEWS ROTARY

●この夏、相次いだ値上げ　石油高騰の犯人は投機マネー　11
現代人の個性を演出する宝石ｏｎメガネ　15
ストレスフリーに禁煙できる離煙パイプ　21
地球のためにできること！　省エネ型住宅「xevo」の魅力　26
高齢者の安心の入浴をサポートするセキスイの浴槽リース　30
健康長寿を目指して！　抗加齢医学とＬ‐カルニチンの役割　34
60種類の野菜と果物・酵素たっぷりエッセンシアで健康的にダイエット　38
目の健康をサポートするやつめホルゲン　48
難聴の原因と上手な付き合い方　49

REGULARS

女性ホルモンの神秘と効用――25
なまずのひとりごと――42
どれみの鼻歌――46
回虫博士の世界漫遊紀行―心のキレイがみえない①――52
獣医師は、なぜ、動物の言葉がわかるの？――54
たかが　われらが日々？――55
あのときこんなこと――58
どこで憩うか―温泉――体を癒す 湯治の宿①――65
世界の食べ物――チーズ⑦――68
京都は優雅――京の染織――71
ＬＩＢＲＡＲＹ――73
９月の運勢――75
編集後記――76

表紙写真　森村　進